

〈論文〉

言語イメージに影響を与える言語外要因

—NHK データ言語内外要因の比較—

G. ベンツェ タマーシュ

キーワード：言語イメージ，方言イメージ，NHK 調査，因子分析

1. はじめに

本論文の目的は、日本における都道府県別の言語イメージの変化を調査することである。言語のイメージは、個人的な要因に基づくが、地方や生活などの影響も大きい。本論文では、言語イメージの分析にNHK放送文化研究所によって1978年と1996年に実施された「全国県民意識調査」のデータを用いる。このデータを使用した研究には塩田(2004)、国吉(1999)、井上(1989)などが挙げられる。このうち井上(1989)は、NHKデータの言語を対象にした項目を用いて各地域の言語イメージについて研究を行った。本論文では、言語を対象としたデータだけでなく、言語外の項目を加えて、様々な都道府県別のデータから、言語イメージの形成における言語以外の項目の重要性について言及する。

2. データ

表1に本研究で使用するデータを示す。表1は「全国県民意識調査」(NHK放送文化研究所 1978, 1996)の項目番号である。NHK以外のデータの一部はインターネットから採用した。以降の章では、それぞれの項目を「略称」で表記する。

表1 項目一覧

	番号	略称	項目
物質的	6-A	「お金汚い」	「お金というものは、しばしば人間を墮落（だらく）させるきたないものだ。」
	6-B	「財産残したい」	「ふだんの生活はできるだけ切り詰めてお金や財産を残したい」
	16-E	「全て金次第」	「今の世の中は、すべて金次第でよくない」
	25-E	「税金OK」	「税金があがっても、社会福祉をもっと充実してほしい」
生活的	29-A	「満足」	「あなたは、今の生活に満足していますか」
	30-A	「宅ゆとり」	「世間一般に比べて、お宅の暮らし[...] 多少ゆとりがあるのみ」
地域的		「所得」	年間所得, 平均, 県別
	1-A	「住み良い」	「あなたは、今住んでいらっしゃる場所は、住み良いところだとおもっていますか」
	3-A	「県好き」	「あなたは、○○というところが好きですか」
		「東京距離」	東京からの鉄道距離
		「京都距離」	京都からの鉄道距離
言語的		「人口」	人口, 県別
		「ブランド」	ブランド総合研究所に2009年行った地域魅力度ネット調査, 約3万人
	21-E	「言葉好き」	「あなたは、この土地の言葉が好きですか」
	21-G	「訛り恥」	「あなたは、地方なまりが出るのは恥ずかしいことだと思いますか」
社会的		「河西」	河西データ (河西 1981)
	11-B	「家族団」	家庭生活ではひとりひとりが好きなことをして過ごすよりも家族の団らんのを大切にしたいと思いますか」
	13-A	「親戚」	「お宅では、日ごろつき合っている親せきは多いですか」
	13-C	「隣人」	「お宅では、隣近所の人とのつき合いは多いですか」
	14-A	「同僚」	「職場や仕事でつき合う人と仕事以外のことでもつき合うことが多いですか」

井上 (1989) では言語を中心とする項目 21-E 「あなたは、この土地のことばが好きですか」と 21-G 「あなたは、地方なまりが出るのは恥ずかしいことだと思いますか」を扱った。

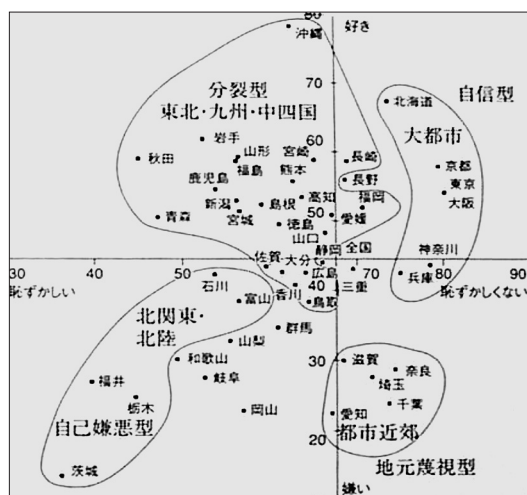


図1 井上 (1989) の 21-E x 21-G に基づく分類

同研究で井上は、21-Eと21-Gの結果を4つの地域に区分している：

- ア) 大都市：土地の言葉が好きで、訛りが恥ずかしくない
- イ) 都市近郊：土地の言葉が好きではないが、訛りが恥ずかしくない
- ウ) 北関東・北陸：土地の言葉が好きではなく、訛りが恥ずかしい
- エ) 東北・九州・中国：土地の言葉が好きですが、訛りが恥ずかしい

本研究では、21-E「言葉好き」21-G「訛り恥」二つの項目と表1に示した項目を比較する。それによって言語イメージの変化に、何が、どの程度影響を与えるのかを分析する。

3. 言語項目との相関係数

3.1 21-E「言葉好き」

まずは、図2に示すような都道府県別の散布図を作成する。グラフのy軸はNHK調査の21-E「言葉好き」の値、x軸は表1に示した項目の値である。

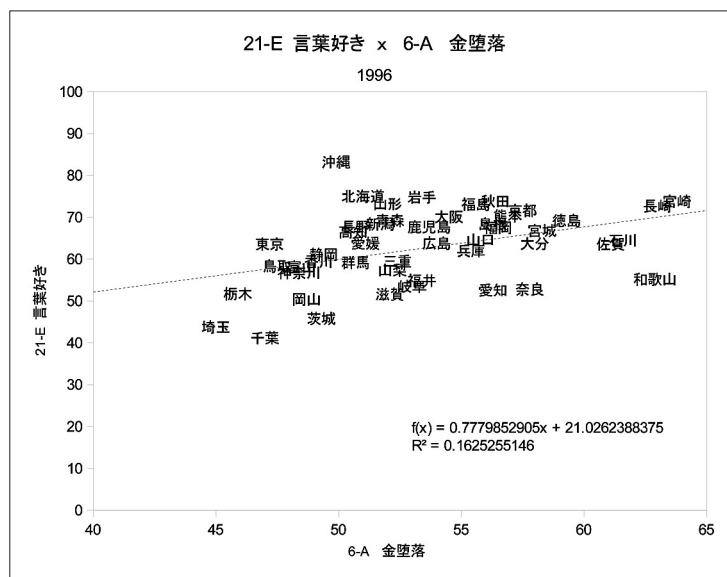


図2 近似直線サンプル 21-E x 6-A

言語項目と言語外項目の関係を明らかにするために、近似直線の式および相関係数 (R^2) を求めた。相関係数 (R^2) が大きいほどx軸にとって項目と21-E「言葉好き」との相関が強い。

図3に相関係数 (R^2) の値を示す。相関係数が高い項目ほど21-E「言葉好き」に対して強いと考えることができる。

この結果、方言のイメージに一番強い影響を与えているのは、「言葉好き」と正の相関がもっとも

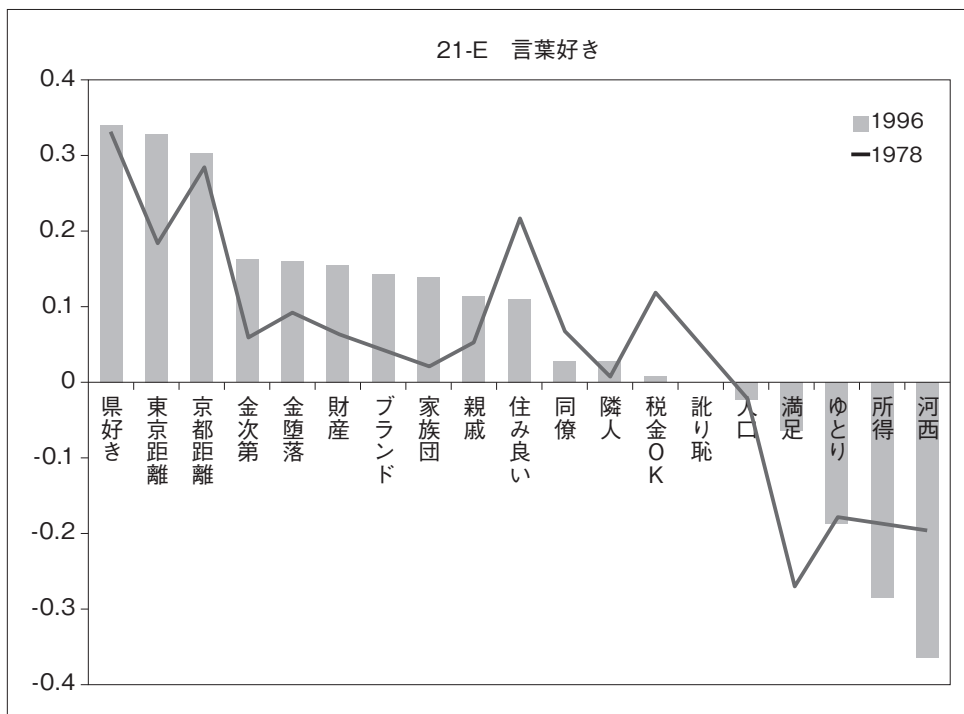


図3 21-E「言葉好き」と相関係数（1996年データの相関が高い順）

強い項目で、その地方のイメージである「県好き」である。さらに、地域的な側面を持つ「東京距離」「京都距離」などの項目が続く。負の相関が強い項目には、「河西データ」「所得」「家のゆとり」などがある。

このことから、所得が平均より高い人は自分の方言について関心が薄く、また標準語率が高い場合は、その程度に合わせ関心が減少していくことがわかる¹。

3.2 21-G「訛り恥」

次に、同様な調査を21-G「あなたは、地方なまりが出るのは恥ずかしいことだと思いますか」に対して行う。この分析によって、人はどうして自分の方言を恥ずかしいと感じるのかを検討する。

図4に21-G「訛り恥」と「地方なまりは恥ずかしいと思いますか」はネガティブな質問であるため、図3とは逆に、相関の小さいものの順に検討する。グラフから分かるように、人口が多い、魅力度が高い地域の県民は、自分の方言をそれほど恥ずかしいと思わない。

正の相関を持つ項目には社会的な側面に属するものが多い（「親戚」「隣人」など）。しかし、これは家族や親戚などよくつき合うと方言が恥ずかしくなるということの意味するのではなく、ただ、家族や親せきなどよくつき合う人たちの様々な側面の一つとして、方言を恥ずかしいと思う傾向があげられる。

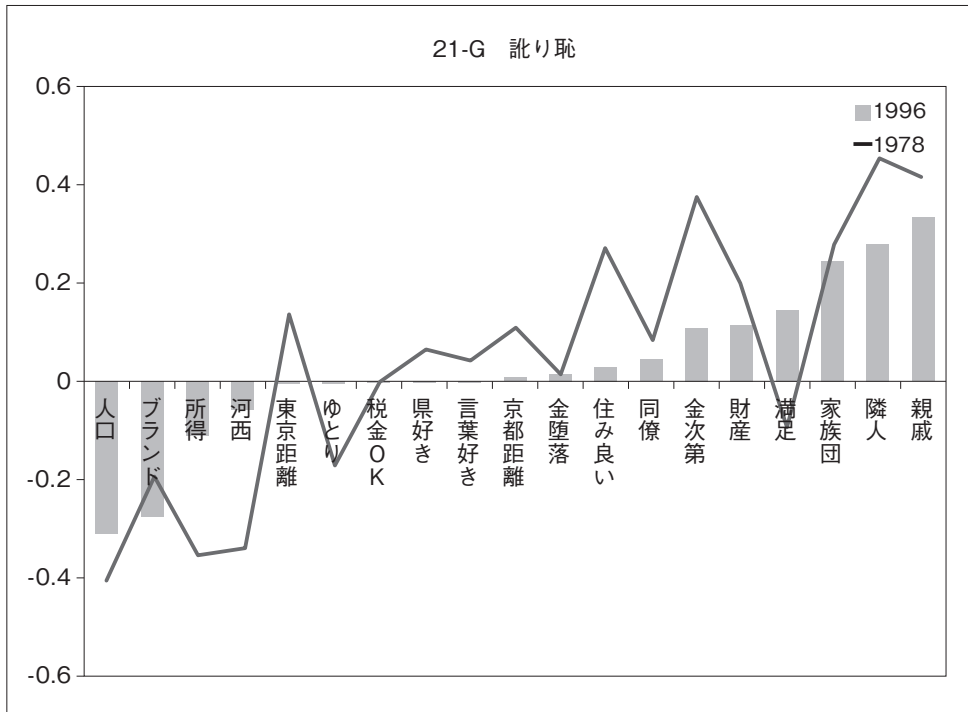


図4 21-G「訛り恥」との相関係数（1996年データとの相関が強い順）

4. 因子分析

先ほど紹介した図2-4で、言語イメージに影響を及ぼす要因を調べたが。続いて因子分析を利用することによって、言語イメージと各項目との関係をより細かく調べてみたいと思う。

NHKデータ以外の項目には過去のデータがないので、まずは1978年と1996年のNHK調査の項目（因子）だけを見よう。図5を見ると、1978年と1996年の調査項目の結果に、変化を読み取ることができる。

グラフ上の矢印は、各項目の1978年と1996年の値を結んでいる。ほとんどの矢印が右上の方向（第一象限）を指している。このような変化を示している項目は以下のとおりである

- ・ 地域的側面：
 - ア)「県好き」
 - イ)「住み良い」
- ・ 社会的側面：
 - ア)「隣人」
 - イ)「家族団」
 - ウ)「親戚」

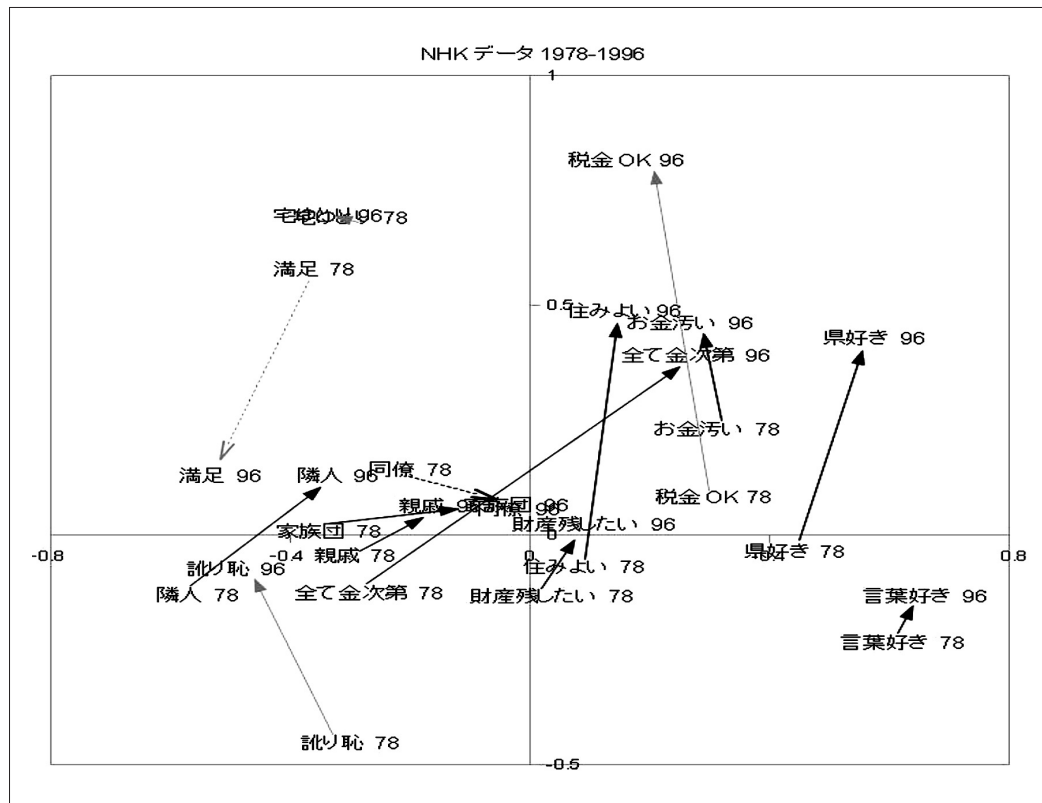


図5 NHKデータの因子分析

- ・物質的側面：
 - ア)「全て金次第」
 - イ)「財産残したい」
 - ウ)「金汚い」

- ・言語的側面：
 - ア)「言葉好き」

地域的側面，社会的側面，言語的側面に関する項目はすべて右上の方向に進む。物質的側面では，「税金OK」以外は右上に向かって。「税金OK」の結果は，1978年，1996年共に第一象限にあるが，矢印は左上の方向を指しているため，上のリストには含めていない。図5によると，1978年から1996年の間に，上述の項目が第一象限に向かってに変化した。しかしそれが社会にとって「良い」方向なのかどうかは，判断できない。「県好き」，「言葉好き」，「隣人」，「家族団」という項目のプラス変化は社会にとって望ましいことと思われるが，「全て金次第」や「金汚い」という項目結果については「良い」「悪い」と短絡的に判断せず，これらの変化を，時代の方向性として受け入れることが重要だろう。

図5は日本全国の平均値に基づいているため、調査項目と地域との関係を知ることは出来ない。各都道府県別データによるポジショニングが出来ないと、調査項目と地域との関係がわからない。下記のグラフでは、各都道府県の位置やNHK以外のデータの結果についてもあわせて分析を行う。これにより、地域と各要因の関連を示す。

図6には、NHK項目の他にNHK以外の項目と各都道府県データを含めた。統計を見てすぐ目につくのは、各都道府県が地図上の位置とほぼ同様に配置されていることである。

これは、鉄道距離という要因が強い影響したためであると考えられる。鉄道距離の数字は当然地理的な距離を表すので、因子分析に鉄道距離を追加すると、地理的に正しいパターンが導かれる可能性が高くなる。鉄道距離と標準語使用率を示す河西データ(図3)の関係は非常に重要である(井上 2004)。また図6の結果では、地域と各要因の関連を測定したものを表2に示す。この表からどの地域にどの要因が影響を与えるかがわかる。

ある要因が1978年と1996年のどちらも同じ地方に属する場合は、その要因はその地方に対して大きな影響を与えていると考えることができる。調査年によって異なる地方属する場合は、その要因の影響力が変化したといえる。

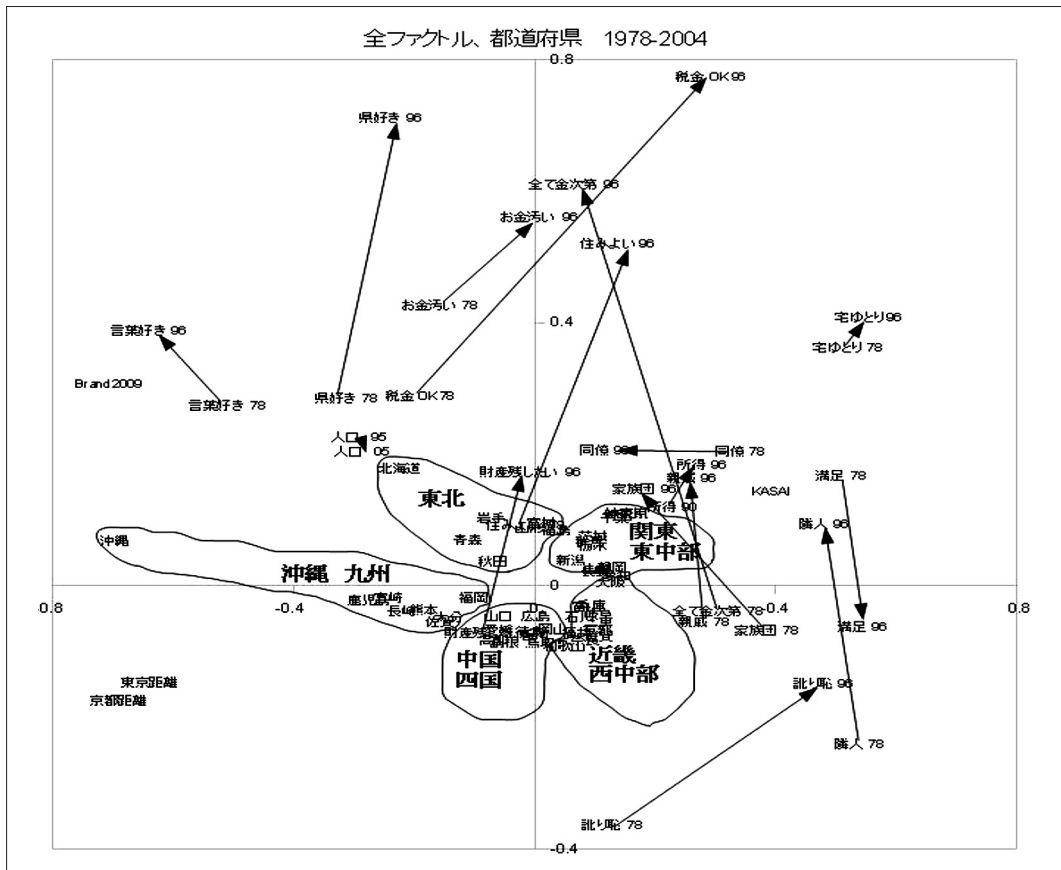


図6 因子分析 全ファクターと各都道府県

表2 因子分析 ファクターと地方の関連

	1978-1996	1978年	1996年
<u>東北, 北海道</u>	「言葉好き」 「県好き」 「Brand 2009」 「人口」 「お金汚い」	「税金OK」 「財産残したい」 「住み良い」	
<u>関東, 東中部</u>	「家ゆとり」 「河西データ」 「同僚」 「所得」	「満足」	「住み良い」 「隣人」 「親戚」 「金次第」 「家族団」
<u>近畿, 西中部</u>	「訛り恥」	「隣人」 「家族団」 「全て金次第」 「親戚」	「満足」
<u>中国, 四国</u> <u>九州, 沖縄</u>	「東京距離」 「京都距離」	「財産残したい」	

この傾向は井上の分析とも一致する。地域と要因の関係を調べることができると同時に、都道府県別の変化を見ることで、全体の変化や程度、その方向性などを詳細に知ることができる。時系列データはNHK調査以外にないので、都道府県別の変化を統計化するためには、NHKデータしか使用できない。

図7に、1978年と1996年のNHKデータにおける都道府県別の変化を示す。

図7には各都道府県の変化を表している。変化はある一定の方向を指してはいない。右上にプロットされた県は左上に移動し、左上にプロットされた県はおおむね中心の方向に進む。一部に地理的な対応はあるが、図1のようにカテゴライズ可能な配置にはなっていない。変化の程度と方向については各都道府県によって異なるのだが、ある一定のパターンを見出すことはできる。右下の都道府県は右上の外側に移り、左下にプロットされた都道府県の一部は右下に移動し、また一部は左上に移動する。図7は、そのパターンを簡潔にモデル化する。

渦巻状の灰色の矢印は、1978年から1996年までの変化を示している。黒い矢印は将来の方向を示している。左下から反時計回りに回って中心へ進む。この傾向に従っている都道府県は、左下から：鳥取、富山、香川、滋賀（栃木と茨城は別）。右上は奈良、広島、愛知、神奈川など（千葉、埼玉、北海道は別）。左上は大阪、京都、新潟、山口などである（東京は別）。各都道府県の変化は図8のような形で進み、渦のように流れる。

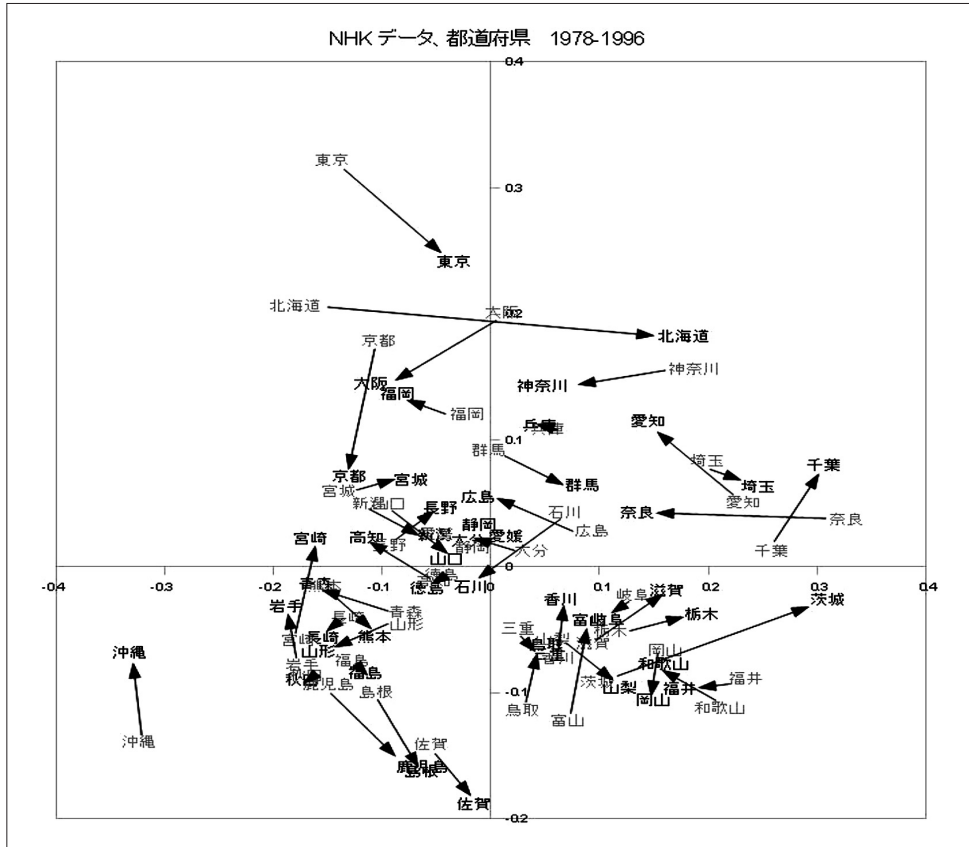


図7 NHKデータの因子分析（都道府県別）

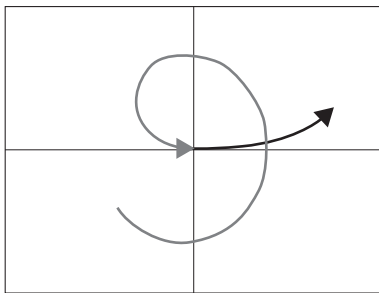


図8 都道府県別変化のパターン

図8の灰色の矢印に当てはまらない千葉や北海道などはどうだろう。これらの地域は黒い矢印に従っていると考えられる。このグループには塩田（2004）の分類によるベッドタウンに該当する地域が多い。ベッドタウンのほかに、工業地域（愛知，神奈川），商業産業（大阪，京都）や観光地もある。第一象限（右上）の方向は実は地域の本当の将来，あるいは「未来への道」を示している。千葉県，埼玉県，もちろん東京は自力で右上方向に進むことができる。

そうではない都道府県は「渦」の「吸引力」に従って流れる。いずれ全ての都道府県は右上の領域に到着するが，渦から跳躍するためにかかる時間は異なるだろう。歴史の長い大阪や京都などのような大都市もこの流れに従っているが，このような都市はいくら経済力があっても，変化の程度は千葉や埼玉のような新しく発展してきた地方より遅い。その理由は，町の歴史，規模や人口などである。また，東京は都の役割を果たして，政治の中心であるから発展の程度も速い（富田 1988）。

5. おわりに

現在の大都市の姿から、その未来を正確に想像することは難しい。今見えるものは過去に始まったことの結果である。現在の技術、情報技術、社会、マスメディアは、過去からの連続的プロセスの結果である。携帯電話の影響だけ見ても、若者の言葉使いに、および言語の普及に非常に強い影響を与えた（田中 2010）。では、現状の技術、コミュニケーション、社会、マスメディアはどんな将来を生み出すのだろう。大都市の真ん中にいるところより、少しだけ広い場所に住みたいという人が増えている。多くの人は、きれいで広い住宅に住めるなら長時間通勤も我慢するかもしれない。交通事情は昔にくらべて随分良くなったはずだ。電車の速度は速くなり、とても便利だ。インターネットのおかげで、家で働く人も増えている。100年前の日本ではあり得ないと思ったこと、誰も想像しなかったことが、現在では当たり前のことになった。同様に、100年後の日本は、現在の想像とはまったく異なった姿になっているかもしれない。社会と言語の変化は強く繋がっているので、社会のこのような変化は言語にも強い影響を与える。方言のイメージは地域のイメージに関わるため地域の変化は言語の変化になる。本論で用いた言語外要因は社会の変化を計るものである。これらの言語外要因と言語イメージの関連の慎重な分析は将来の課題にしたいと思う。

〈注〉

- (1) 河西データ（河西，1981）は日本言語地図によって、各地方で使用する標準語と方言の割合を表すデータである。

参考文献

- 井上史雄（1989）『言葉づかい新風景—敬語と方言—』秋山書店
 ———（2004）「標準語形初出年と鉄道距離重心—鉄道距離・使用率・初出年の3D散布図と東西クラスター—」
 日本語科学16 pp.47-68
 井上史雄・河西秀早子（1982）「標準語形による方言区画」計量国語学 13-6
 河西秀早子（1981）「標準語形の全国的分布」言語生活 354 pp.52-55
 国吉和子（1999）「大学生の郷土意識と社会的アイデンティティ（I）」沖縄大学紀要 16 pp.1-35
 総務省 統計局・政策統括官・統計研究所〈<http://www.stat.go.jp/data/index.htm>〉，（2012年1月16日最終閲覧）
 塩田雄大（2004）「世論調査から見た日本人の方言意識の一端」多言語社会研究会配布資料@東京外国語大学郷サテライト 3F
 田中ゆかり（2010）『首都圏における言語動態の研究』笠間書院
 富田和暁（1988）「わが国大都市圏の構造変容研究の現段階と諸問題」人文地理学会 40（1）pp.40-63
 NHK放送世論調査所（1979）『全国県民意識調査データブック』NHK放送文化研究所
 NHK放送世論調査所（1996）『全国県民意識調査データブック』NHK放送文化研究所